アラルの真珠
Aral Pearl

地上から、この海が消えたら
Suppose the sea disppears from our earth

Introduction

わたしたちは水の惑星に住んでいる。

この惑星では、だれもが「水」は無尽蔵だと思っている。ところが近い将来「水」が限りある最後の資源であることを知らされる。

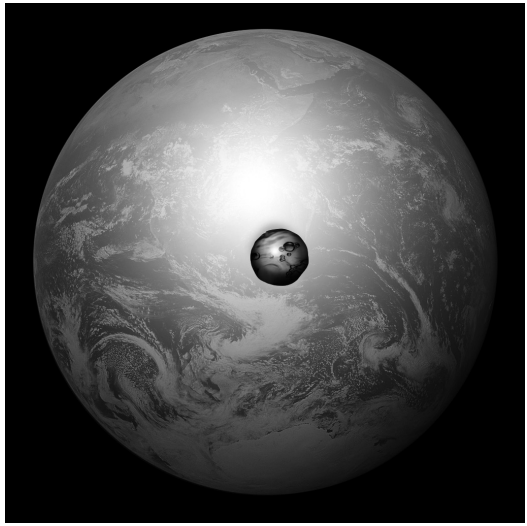
この惑星の「水」は神秘的で、か細くたよりない。人類は「水」をめぐり、争い、奪い、殺しあってきた。今世紀にあってもそうだし、来世紀もおそらくそうだ。

それはなぜか。こたえは８０億を超えた地球人口に対し「水」の絶対量が足りないことにつきる。地球にある「水」は循環するが、減っていくわけではない。偏在し循環がとどこおる。そして汚染されていく。

地球の表面積の７０％が海だから「水」はこの惑星の大部分を占めているように思う。そりゃあ無尽蔵だと。しかしだ。地球をバスケットボールに見たてると「水」はピンポン玉ほどだ。しかもその９７・５％は海水で、淡水は２・５％、２５０万立方キロ。大部分は南極や北極圏などの内部氷床や氷河だ。利用可能な「水」は淡水の０・８％。河川や湖など利用の容易な「水」は、１０万立方キロ、０・０１％ばかりだ。

いま、人類に問う。

この星のすべての種、もちろん植物も含めてだ。その生命に欠くべからざる「水」を、そしてこの美しい「水」の惑星を、どうするのか。



地球の体積は1兆８３３億立方キロに対して水の総量は
１４億立方キロにすぎない。図に表すと上のとおりだ。

Index

Chapter 0 地上から、この海が消えたら
Suppose the sea disppears from our earth 14

Chapter 1 わが祖国について *About my native country*

アラルの冬 1961
Winter in Aral 36
アラルの夏 1961
Summer in Aral 54
それぞれの祖国 1961
Each native country 64
祖父たちの亡命 1918
Defection of grandparents 84
サイドカーの男 2019
A man rides a motorcycle with a sidecar 97
榛色の瞳の少女 1974
A girl with hazel eyes 111
サイドカーの男2 2019
A man rides a motorcycle with a sidecar 2 119

榛色の瞳の少女2　1974
A girl with hazel eyes
サイドカーの男3　2019
A man rides a motorcycle with a sidecar 3
榛色の瞳の少女3　1979
A girl with hazel eyes

Chapter　2　宙へ　To the sky

忘れえぬ女　2019
Unforgettable lady
カザリンスクの食卓　2019
A table at Kazarinsk
アナスタシアのラボ　1984
Anastasia's lab.
カザリンスクの食卓2　2019
A table at Kazarinsk
クレムリンの迷宮　1985
Labyrinth of Kremlin

125
132
137
142
155
166
180
184

Index

カザリンスクの食卓３　２０１９　189
A table at Kazarinsk
クーデター前夜　１９８９　197
The night before coup

Chapter　３　地上からこの海が消えたら
Suppose the sea disappears from our earth

アレックスとアナ、アラルへ　１９９２　214
Alex and Anastasia head to Aral
アナスタシアのアラルのラボ　１９９３　235
Anastasia's lab. at Aral
アナスタシアの死　２００９　247
Anastasia is gone
孤独　２００９　255
Lonley
もうもどれない、不可逆点　２０１９　274
Irreversible point

ハスキーボイス　２０１９
Husky voice 282
東京、生と死のはざまで　２０１９
Tokyo, between life and death 293
死に向かう日々　２０２０
Facing death 311
サイテーション・ディスカバリー　２０２０
The Citation Discovery 318
地球周回軌道からの帰還　２０２０
Come back from an orbit around the earth 328
世界へ　２０２３
Toward the world 348
Postscript 360

主な登場人物

アレックス
アレクサンドル・ニコラエフ

１９５６年カザフスタン、アラル海の地方都市に生まれる。少年時代から宇宙飛行士に憧れ、やがて１９８４年ソユーズ１０でソ連宇宙ステーションサリュート７に長期間滞在する。のちにソ連共産党中央委員になりゴルバチョフ政権のなかでグラスノスチなどを担当する。ソ連崩壊後、故郷アラル海の再生に取り組む。

アナ
アナスタシア・ニコラエヴァ

アレックスの妻。榛色の瞳の少女、１５歳の時にアレックスと知り合う。将来を嘱望された若手の理論物理学者だったが、アレックスに帯同しアラルに移住。アラル海の調査・研究に生涯を捧げる。

木村 美知子

今回の調査・研究チームのプロジェクトリーダー、大学院生時代は山田太郎のアシスタントとして、天真爛漫な性格で周囲の研究者たちから重宝される。次代の水利を深く研究する水文・水資源、とくに水利の専門家。

山下 弓子

山田太郎の研究のパートナーで美人の文化人類学者、大学教授。
アレックスに結婚を申し込まれアレックスの晩年を看取る。アナスタシアの研究成果に心を打たれていた。

わたし
山田 太郎

１９５６年日本生れ。
地球環境問題とくに水問題を研究する学者、国際機関や、国の財団を定年退職したあと自由に旅をしている。

ミント

幼少のアレックスの想像が生んだ架空の人物、ただ祖父の精霊かもしれない。

CHAGATAI
MONGOLS
SOLANGKA
CHURCHE
CHINA
JAPAN
Great Desert
DELHI
BENGAL
SYAM
JAVA
CEYLON SERENDIB
SILLAN, SEYLLAN
ADAMS PEAK
NICOBAR Ins
NECUVERAN, NICOVERRA
INSULA NUDORUM
ANDAMAN
ANGUMAN
DOMDIN
Temaserim
SUMATRA
JAVA of the Rhul
SEA of ARAL
in Kirghiz: ARAL-TENGHIIZ, i.e. Sea of Islands
Greatest depth 27 fathoms
THE GREAT
Borsuki Desert
Isiland Vozrozhdenie
Isiland Cape Caer
I. Barsa Kimesa
Island of Tchakmakly
Island of Vozrozhdenie
Island of Kulandy
Island of Tchakmakly
Island of Kulandy
Island of Vozrozhdenie

KHANATE OF PERSIA
BAHARITE MAMELUKES
KHANATE OF KIPCHAK
KHANATE OF CHAGATAI
EMPIRE OF THE SULTANS OF DELHI
TIBET
GAROS
KASIAS
Mountains of Kamrú
Cherrapunji
Jintiapur
Ghoraghata
Satgaon
CALCUTTA
Chittagong
Sadikpur
MALDIVES
DHIBAT AL MAHAL
SEA OF THE INDIES
OF OMAN
RED SEA
BULGARIA
TURKEY
CUMANIA
ALANS
GREAT ARMENIA
GREAT HUNGARY
BASHKIRDS
KIJ-MEKRAN
OMAN
DEOGIR
L. BALKASH

ЛЯПИН НОХИМОВ

Chapter 0　地上から、この海が消えたら

Suppose the sea disppears from our earth

２０１９年　夏

カザフスタン共和国　ヌルスルタン

首が痛い。ちいさな窓にへばりついて上空を見あげていたからだ。

空は青い。青いなんてものじゃない。

遠く群青が深くなり、どう言えばよいのか言葉の表現の限界を感じる。

宇宙だ。

１３８億年のかなたの「無」の一点からはじまった時空だ。

その創造主が神だとしても、どれほどのエネルギーがあれば、これだけのものを創れたというのか。最先端の理論物理学者らが議論をかさねて、まだ理解できない宇宙とは、いったいなんだろうか。

それに宇宙は光速の３倍もの速度で膨張をつづけ、まだ加速しているという。宇宙で光より速いものは無いのではなかったのか。どう理解すればよいのか。

宇宙の膨張、つまり宇宙の生命は１４００億年という。いま１３８億年の宇宙は、その寿命の１０分の１くらいのところにいる。

１４００億年の先には宇宙の死があり、なにもない暗黒がおとずれるという。

宇宙の「死」とか無限の「無」など、それはほんとうのことかと思う。思うのだが、ほどなく思考は停止する。

こんどは首をひねって、眼下に目をやる。

見えるのは草原の連なりだ。カザフステップという。ヒマラヤの褶曲の皺が、このあたりでは、ちいさなうねりとなって太陽の光に輝いている。

「美しい」

思わずくちをついた。まるで少女のか細い指で織られたペルシャ絨毯のようだ。どうすれば光をこのようにとらえ、陰翳をまとうのか。光に撫でられ絹のようになめらかで心をざわつかせる。記憶にある官能の肌のようだ。それは愛のようなものだというなら、それが言い得ている。

この惑星は、そうした少女のようにいたいけで、愛すべきだ。いや愛すべきというと勘違いする。庇護し、大切に守らなければならない存在ということだ。

それが、わたしたちの地球だ。

この宇宙で、４６億年まえに誕生した。

菓子にたとえるのはいかがかとは思うが、水に包まれた葛氷菓のような美しい惑星だ。

食べれば美味いかもしれない。だから食べつくそうとしているやつらがいるのか。まあそのはなしはいい。

惑星を美しく包むその水は、どこからやってきたのか、いまだ議論はさだまっていない。あたりまえにある水は、過去にはいったいどこに、どんなカタチで存在していたのか。

水はこの星に生命を誕生させた。

生命は進化の過程で、種のひとつである人類を生み、特段の進化のプロセスをあたえた。
人類は豊かな水をわがもの顔で享受し、すさまじい増殖と繁栄、殺戮と破滅をくりかえしてきた。
言葉を選ばないなら、人類はまるでイナゴの大群のようだ。
無秩序に地球のほかの生命を捕食しつくし続けた。その結末として人類はみずからの棲む地球の破壊者になってしまった。
いや地球の破壊者というほどのものではない。正確には地球上の自分たちの生存環境を破壊しているというのがただしい。
おさない子供がじぶんの組み立てた積み木の城を、こわしているさまに似ている。
人類がＡＩの進化をおそれるのは、自分たちがこの星のイナゴになっていることを知っているからだ。ＡＩの客観的な審判がくだれば、人類は駆除の対象となるのだ。
ＡＩが神になることを知っている。
イナゴは虫偏に皇と書き「蝗」とした。
こんな漢字を誰が作ったのか。残虐な皇帝が民の生と財を食い散らかしてきたという意なのだ。
司馬遷の『史記』（ＢＣ１００頃）にも、蝗害が都市国家をのみこみ消滅させる記述がでてくる。
匈奴の襲来よりおそろしい、と。
そう、人類は蝗なのか。
地にあるものを、ことごとく食いつくすのか。